

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第二十一卷 第三號

大正四年九月一日發行

## 論叢

資本論第一版と第二版との相違法學博士 河上肇

南京條約前以の治外法權問題に就いて 文學博士 矢野仁一

無收益財産の課税 法學博士 神戸正雄

江戸時代に於ける田島永代賣買の禁止 文學博士 三浦周行

## 時論

支那の排外運動に對する根本方策 法學士 作田莊一

## 說苑

農政上より見たる家産制度 經濟學士 八木芳之助

リカアド労働價值法則の妥當性に就いて 經濟學士 森耕二郎

## 雜錄

近世農村問題の性質 經濟學博士 本庄榮治郎

我國最近の死産に就て 經濟學士 岡崎文規

間接稅負擔の地方別研究 法學士 汐見三郎

## 法令

五分利國庫債券(第二十五回)發行規程・朝鮮簡易國勢調査ニ關スル件・樺太簡易國勢調査施行規則

(禁轉載)

## リカアドに於ける勞働價值法則の

### 妥當性に就て (二)

森 耕 二 郎

(二) 以上リカアドの本來の形に於ける勞働價值法則は、もどく、現今の資本主義的經濟社會に於ける價值、價格現象を説明せんとするものなることを述べたのであるが、彼れの勞働價值論は、さきにも述べたるが如く、最後迄その純粹なる形を保つことができずして、遂に所謂修正若くは制限せらるゝことゝなつた。そうしてその修正若くは制限が歴史的のものにあらずして、論理的のものであることは、右述べたる所に依り明らかである。

リカアドに依れば、貨物の相對價值が各々その生産に費されたる勞働の分量に依り決定せらるゝと云ふは、その各々の貨物の生産に使用せらるゝ所の固定資本と流通資本との割合が同じであり、且つその固定資本の持續性にも差等がない、と假定した上での提言に外ならない。ところが如何なる社會に於ても、器具、機械、及び建物などに投せらるゝ所の固定資本と、勞賃に投せらるゝ所の流動資本との組合せの割合は、常に必らずしも同一でないばかりでなく、固定資本の持續性にもそれゝ差等があるの結果、この場合に於ける貨物の交換價值は、必らずしもそれが生

産に費されたる勞働の分量のみによりて決定せられずして、その外に利潤、勞賃をも亦貨物の交換價值の構成要素として現はれるのである。即ち彼は云ふ。

『——併し社會の各状態の下に於ては、各種の職業に於て使用さるゝ道具、器具、建物、及び機械は、悉く耐久力の程度を異にし、随つて又此等を生産するには、異つた勞働量を必要とする。

『更に勞働を支持するための資本と、道具、機械、及び建物に放下さるゝ資本との間に於ける比例も、その組合せが種々雑多である。固定資本の耐久力の程度にこの差違あること、及び二種の資本の組合はさるゝ比例にこの相違のあることは、貨物の相對價值の不同を惹起する原因として、貨物の生産に必要な勞働量の大小といふこと以外に、他の一原因を引き入れる、——この原因とは勞働の價值の騰落を云ふ。』

このリカード價值論の修正の内容は、『恐らくは經濟學上の論文に含まれてゐる章句の中で最も難解なるもの』<sup>2)</sup>であると云はれてゐる如く、頗る複雑難解を極めてゐる。随つて深くその内容に立ち入りて分析、解剖し、その本質を握つたものは殆んどないと言つてよい。この修正の本體如何を見定めんがためには、私の見る所に依れば、彼の謂ふ所の固定資本、流動資本の概念を瞭にしたる上、資本使用の諸々の場合——四つの場合——に於て、利潤の相對價值に及ぼす影響、および勞賃の相對價值に及ぼす影響を、彼の示すところの例證に従ひ、考察するを必要とするのであるが、このことのみにて可成大きな困難なる仕事の一つを成すのであるから、私はこれが研究を近々發表することあるべき他の論文に譲ることとし、こゝには單にこの點に關する主要な

1) Ricardo, *ibid.* p. 24. (同譯本45頁)

2) Whitaker, *History and Criticism of the Labour Theory of Value*, 1904. p. 52.

る彼れの詞を擧げ、これに短評を加へるにさめて置く。『原論』第一章第四、五節に於て彼は云ふ。

『假りに二人が各々一〇〇名の人を一年間二つの機械の建造に使用し、他の一人が同數の人を穀物の耕作に使用するとせば、その年の終りに於て、各々の機械は穀物と同一の價值をもつであらう。何故なれば此等は各々同一量の勞働に依つて生産さるゝであらうから。更にその機械の一を所有する人が、次の年に布を製するために、一〇〇名の人を補助によつて之を使用し、而して今一つの機械を所有する人も亦同様に、一〇〇名の人を補助によつて、綿製品の製造に彼れの機械を使用し、他方に農業者は以前の如く穀物の耕作に一〇〇名を使用し續くと假定せよ。第二年には、彼等は總て同一量の勞働を使用したであらう、而も織物業者並びに紡績業者の有する財及び機械全部は、一年間使用されたる二〇〇名の人を勞働の結果、或は寧ろ一〇〇名の人を二年間の勞働の結果であるに拘はらず、穀物は一〇〇名の人を一年間の勞働に依つて生産されたものであらう。その結果として若し穀物が五〇〇磅の價值を有するものとせば、織物業者の機械及び布全部は、一〇〇〇磅の價值を有すべき筈であつて、紡績業者の機械及び綿製品も亦穀物の價值の二倍を有すべき筈である。然るに此等のものは穀物の價值の二倍以上を有するであらう。何故なれば、第一年目に於ける織物業者及び紡績業者の資本に對する利潤は、彼等の資本に附加せられてゐるに反し、農業者のそれは費消され且つ享樂されたから。されば彼等の資本の對久力と異なる段階あるがため、或は同じことではあるが、一團の貨物が市場に齎らさるゝ前に經過しなければならぬ時間があるために、貨物の價值は、その上に費された勞働量に正確に比例せずして、即ち二對一と云ふやうにならないで、それは最大の價值あるものが、市場に齎らさるゝまでに經過しなければならぬより、長い時間を償ふために、若干それ(勞働の分量)以上に昇ることになるであらう。』

『利潤の下落がなければ、勞働の價值の騰貴はあり得ない。若し穀物が農業者と勞働者との間に分配するのであれば、後者に與へらるゝ部分が大きければある程、前者にはより少し、か残らないであらう。そのやうに若し布又は綿製品が勞働者と彼の雇傭者とに分配さるゝのであれば、前者に與へらるゝ部分が大きければある程、後者にはより少し、か残らない。そこで

說苑

リカードに於ける勞働價值法則の妥當性に就て

第二十一卷 (第三號 一三五) 四三三

假りに、勞賃の騰貴のために、利潤が一〇パーセントから九パーセントに下るとするならば、製造業者は、彼等の固定資本に對する利潤として、彼等の財の通常の價格(即ち五五〇〇磅)に五五〇〇磅を附加する代りに、その額に九パーセント即ち四九五磅をしか附加しないであらう。隨つて價格は六〇五〇磅の代りに五九九五磅となるであらう。穀物は引續き五五〇〇磅で賣れるであらうから、それにより、多くの固定資本が使用されたる所の製造品は、穀物又はそれにより、少い分量の固定資本が遣入つてゐる所の或他の財に比較して下落するであらう。労働の(價值)の騰貴又は下落による財の相對價值の變更の程度は、固定資本が使用されたる全資本に對して保つ所の比例如何に依るであらう。極めて高價なる機械により、或は極めて高價なる建物の中に於て生産さるゝ所の、即ち市場に齎らされ得る以前に長時間を要する所の、總ての貨物は、相對價值に於て下落するであらうし、他方に於て、主として労働に依つて生産さるゝ所の、即ち迅速に市場に齎らさるゝ所の、總てのものは、相對價值に於て騰貴するであらう。』

右はリカードがその本來の労働價值説に加へたる所謂修正とも稱すべきものゝ大要たるに過ぎぬのであるが、かく彼がその労働價值説に修正を加へるに至つたのは、資本の持続性に差異ある場合(異なる生産部門)に於ては、(マルクスの言葉を用ふれば、資本の有機的組成に變化ある場合に於ては)、一般平均利潤率の法則の作用することに依り、資本の種類如何を問はず、同一額の資本に對しては或一定期間に對して、皆一樣に同一の利潤率が存在する結果、利潤率が平均に歸せる時に、現實の個々の貨物の交換比率を決定するのは、決してそれが生産に費消されたる労働の分量ではなく、そこに労働價值より離れたるところの生産價格(マルクスの詞)が見出される、と云ふ現實の事實を認識せるに由るものである。

この労働價值論に對して加へられたる所の修正は、彼れの純粹なる形に於ける労働價值論に對

1) Ricardo, *ibid.* pp. 28—9 (同譯本53—5頁)

して、果して如何なる程度と意義に於て、重要を持つてゐるであらうか、それは勞働價值説の拋棄を意味せざるや否やが次に來るべき問題である。私はこの問題に就て左に若干吟味する所あるであらう。

(A) さきに述べたる所の、リカアドの本來の形に於ける勞働價值論は、獨り原始社會にのみ適用されるべきものとせられてゐる、とする所の論者は、この修正に重きを置き、それはリカアド勞働價值論の拋棄を意味するものであつて、後に残つた所の價值説は畢竟一種の生産費説に過ぎずして、それは彼が現今の資本主義社會に於ける價值論として當に主張せんとするものに外ならぬといふ。

マーシャルがこの解釋をとする一人であることは云ふ迄もないが、なほ彼れの外にこの見解をとるものが可成ある。例へばゴナーは自分の編纂にかゝるリカアドの原論の序言に於て左の如く云ふ。

『勿論彼(リカアド)は屢々勞働を以て交換價值の基礎であると説く傾があるが、しかしそれは大いに非難すべき不充充分なる彼れの説明に因るものであつて、彼れの著書を更めて研究すれば、かゝることは彼が眞に心の裡に於て意味して居つたものではない、と云ふことを一層克く知ることが出来るのである。彼が主張しやうとしたことは、たゞ貨物の生産に費されたる努力の分量と交換價值との間に確な關係が存在すると云ふこと、換言すれば二者は共に變動すると云ふこと、に過ぎない。』(註)

(註) 同様の解釋を爲すものは可成多い。例へばカツセルはこの點に就て左の如く云ふ。

『リカアドは、その往々かなり珍妙なる抽象と前提とによつて、結局何を主張したのか? この問題に對する答解としては大抵次の答解あるのみである、——リカアドは、全價格構成を生産費によつて説明せんがために、實際の生産に協力せる種々なる要素をたゞ一つの要素に引き直ほさんとした。』

その他スチエワアト、<sup>2)</sup>ベエム・パワアク、<sup>3)</sup>クニースなども亦この解釋をとる。今こゝに一々擧げぬ。詳しくはローゼンベルグ、およびデイールの研究を見よ。

以上紹介したる所の學者は、リカアドの勞働價值說に對する修正を特に重要視して、彼れの價值論は勞働價值論と云はんよりは、寧ろ一種の生産費說なりと解すべきであるとするものであつて、この解釋の基礎は、その原論第一章第四、五節に於て爲されたる所の修正の外に、一八八七年以後ポーナア、ホランダアなどに依つて出版公表せられたる所の彼れの書翰集に於て現はれたる彼れの見解、態度をその主なるものとす。今これらの書翰集に就て、吾々をしてこの解釋を最もよく容れしめるであらうが如き彼れの書翰を搜し見るに、さし當り彼れが一八二〇年三月二日マカロツクに宛てたる手紙に左の如きものがある。

『私はこの問題に就てよく考慮したる後、貨物の相對價值に變化を惹起す原因が二つあると思ふ。(一)は貨物を生産するために必要な勞働の相對的分量であり、(二)はかゝる勞働の所産が市場に齎される迄に經過しなければならぬ相對的時間これである。固定資本に就ての總ゆる問題は、この第二の規則の下に來るのであつて、私は貴下が御望みならば、それを説明するであらう。』

- 1) Cassel, "Die Produktionskostentheorie Ricardo's und die ersten Aufgaben der theoretischen Volkswirtschaftslehre," Zeitschrift für ges. Staatswiss. 1901. S. 71—2.
- 2) Böhm-Bawerk, "Zur neuesten Literature über den Wert, Conrad Jahrbücher, 1891. S. 875—80.
- 3) Rosenberg, a. a. O., S. 33—9.
- 4) Diehl, a. a. O., S. 49—50.
- 5) Ricardo's Letters to J. R. Mc Culloch 1816—1823, ed. Hollander, 1895, p. 65.

更にリカアドが同年六月十三日附マカロツクに宛てたる書翰は、この態度を最もよく現はせるものであつて、(その一部分は)屢々引用せらるゝ所のものである。

それに於て彼は最初に、『私は、貨物が市場に運ばれる迄の相對的時間が、その價格、若くは寧ろその相對的價值に及ばず影響を説明するに就て、若干の困難が伴ひはすまいかを怖れる、』と云ひて、例を擧げて詳しく説明したる後、左の如く言つてゐる。

『だからして嚴密に言へば、貨物に費されたる勞働の相對的分量は、勞働のみがそれに費され、而もともに同じ時間費されたる時にのみ、その相對的價值を規制するものである。……』

『私は、若し私の著書にある價值に就ての章を書き直はすとすれば、貨物の相對價值は、一つの原因でなしに二つの原因に依つて規制せらるゝと云ふことを承認するであらう、と時として思ふことがある。その二つの原因とは、問題とする所の貨物の生産に必要な相對的勞働分量と資本が休止してゐる(投せられてゐる)時間に對する、即ちその貨物が市場に齎らされる迄に對する利潤率とを指す。』(註)

(註) なほ左の彼れの書翰も亦、彼が生産費論者であつた證據を示すものとして、屢々擧げられる所のものであるが、しかしそれらは右に擧げたるもの程に強くそのことを示してゐない。それらはその勞働價值説に對する單なる修正若くは制限たる以上の意味を表はしてゐない、と私は思ふ。日附順にそれらを左に引用する。

一八一八年一月三日附マルサス宛——『だから兎に角需要供給が唯一の價值規制者ではない。キング卿や貴下が需要供給に依つて何を意味せしめらるゝやを知り度いものである。如何に需要が大であつても、それは決して永久的に貨物の價格をその生産費——それに生産者の利潤が含まれる——以上に上げることができない。だからして永久的價格の變動の原因を生産費

1) *ibid.* p. 69.

2) Ricardo, *ibid.* p. 71.



に求めることは當然であるやうである。<sup>1)</sup>

一八一八年一月二日附マカロツク宛——『私は、明に、私の著書(原理のこと)に於て、資本の持続性が同じでない場合には、價值は労働の分量に依りてのみ決定せられない、と云ふことを述べて置いた。<sup>2)</sup>』

一八二二年五月一日附マカロツク宛——『貴下は、貨物の價值をそれが生産に必要な労働の分量に依りて測定することに於て、私より若干過ぎてゐる。貴下は何等の例外、制限を認めざらんとするが如くであるが、私は、貨物の相對價值の諸變化のあるものは、それを生産するに必要な労働の分量以外の原因に歸し得べきことを常に認めやうとするものである。若しも百個の煉瓦の高價なる機械に依つて生産せられたるモスリンの或る一定の分量に對する相對價值が變動したとするならば、それはこの二つの原因の何れか一つに歸するであらう。——その何れが生産する爲に必要な労働が増加したか減少したか、若くは勞賃が一般的に騰つたか下つたか、その何れかであらう。第一のものが(價值)變動の原因なることに就ては、貴下と私とは全く同意見である。しかし貴下は、同じ労働分量がそれ／＼煉瓦とモスリンとに投ぜらるゝに拘はらず、その相對的價值は、労働の價值が騰り若くは下つたが故のみに依つて、變化すると云ふことを認められないがやうである。しかもこの事實は私には否定すべからざるものゝやうである。この第二の原因に就ては、私はマルサスやその他のものゝやうに、多くの重要を認めないけれども、全然それに対して目を閉ぢるわけには行かない。<sup>3)</sup>』

一八二三年八月二日附マカロツク宛——『貨物(の價值)がかくの如く利潤の變化のために變動する時に、貨物の生産に必要な労働の分量以外に、他の變動の原因はないと確言することは正しいであらうか？ それは正しくない。實際上貨物(の價值)が利潤の變動に依つて變動するのはホンノ僅かである、と云ふのは利潤は一般的に極めて少しゝか變動することがないから。しかし私は、それかと言つて、若し利潤が變化するならば、貨物も亦變動すると云ふことを認めざらんとするものではない。<sup>4)</sup>』

右に引用したる二つの書翰に於ては、リカアドが價值の變動原因として労働の外に利潤、勞賃

1) Ricardo's Letters to Malthus 1810—1823, ed. Bonar, p. 148.

2) Ricardo's Letters to Mc Culloch, p. 14.

3) Ricardo, ibid. pp. 131—2.

4) Ricardo, ibid. p. 178.

をも認めること可成強きがやうである。しかし彼れが、それに於て、若し價值に關する章を書き直せば、價值決定の原因として二つの原因を認むるであらうと云ひて（一八二〇年）、その翌年五月「原理」第三版を出し、そうしてそれには、各々固定資本と流動資本との組合はせ異なるか、若くは固定資本の持続性異なる場合に於て、利潤、勞賃の價值變動に及ぼす影響を論ずることが一層詳しいのであるから、右書翰に現はれたる價值の修正も、「原論」第三版に現はれたるそれ以上の程度のものでないことが容易に想像し得らるゝ。なほリカアドは、勞働價值説に執着すること余りに甚だしきマカロツクに對しては、マルサスに對するとは反對に、常に勞働價值論の修正せられざるべからざることを論ずること頻りであることから考へても、右の書翰に現はれたる修正に余り重きを置くのは如何かと考へられる。

リカアド價值決定要素として、勞働の外に利潤、勞賃をも認めるに至つたこと、換言すればその本來の形に於ける勞働價值説を緩和するに至つたことは、その書翰集に於ても現はれてゐる如く、價值問題に關して朋友と論戰熟慮したる結果、漸次年月の経過と共に、その程度を強めて來たのであるが、このことはその『原理』の第一版、第二版及び第三版を相互比較し、その修訂増補せられたる跡を見ることに依つても亦知ることができる。

「原理」第一版と第二版との間には大した差異はない。第二版に於ては、第一章を第五節に分ちて各々の節の頭に見出しが附加されたこと、所々に於て字句が變更訂正せられ、ならびに章句が置き換へられたることの外、第一版に全然なかつた所の提言、即ち（異なりたる生産部門に於

ける固定資本と流動資本との組合はせの割合が異なる場合、若くは固定資本の持続性に差異ある場合の外）流動資本の使用者に歸つて來る期間の異なる場合に於ても亦、勞働以外の原因に因つて價值の變動が惹起されると云ふこと——彼がその修正を一段と押し進めたことを意味する——が追加されてあるに過ぎない。（註）

（註） 第一版になくして第二版に附加されたこの唯一の追加は左の如きものである。

『流動資本は基だ一樣ならざる時間を以て循環する、若くはその使用者に回收するであらうと云ふことも亦注意すべきである。農業者に依つて種蒔の爲めに買はれたる小麦は、パン焼人によつてパン製造の爲めに購はれたる小麦に對しては、比較的に固定資本である。前者は小麦を土中に遺し去り、而して一年間は何等の報酬を得ることができない。後者は小麦を挽いて粉となしそれをパンに製造して彼れの顧客に賣り、而して彼は一週間の中に前と同一の仕事を再びするために、或は他の仕事を始めるために彼れの資本を自由になし得るのである。』

『流動資本の持続性が異なる場合にも、同じ結果が起るのであらう。同じ資本が投ぜられてゐる二つの異なる産業の性質から、一の製造業者は彼れの生産した貨物を一年細た、ねば市場へ齎らすことができないのに反し、他の製造業者は三ヶ月にしてその貨物を市場に齎らすことができることとすれば、第一の貨物の第二のものに對する相對的價值は、勞賃の騰貴、利潤の下落に伴ふて下落するであらう、このことが眞であると云ふことを證明するために、更に計算することは必要ではない。何故と云ふにそのことは、既に考察した場合即ち二つの同じ資本の持続性の程度の異なる場合と全く同じ原則に依據するものであるから。』

ところが第三版に至つて可成り多くの増訂が施された。そうしてそれらは主として、勞働價值説の制限を以前よりはより多く重要視して來たことを示してゐる。即ち先づ第一に舊版に貨物の

- 1) Ricardo, Principles' 2nd ed. p. 21. (第一版23頁Again two manufacturers ……の章句の次に這入るもの、第三版にもその儘存續)
- 2) Ricardo, ibid. p. 36. 第一版 38 頁の These result ……の章句の前に這入るもの)

交換價值は専ら(Solely)<sup>1)</sup>各貨物に費されたる勞働の比較的分量に依る、とあつたが、新版に於ては殆んど専ら(almost exclusively)<sup>2)</sup>と訂正せられた。次に彼は第二版に於て第一章を五節に小分したが、新版に於てはそれを七節に小分し、固定、流動資本の廻轉の差異が貨物の交換價值の變動に及ぼす影響をば特に前よりはより一層詳細に論せんとした。更に彼はその第七節「價值の不變動に就て」<sup>3)</sup>を附加して、價值の不變動の到底存在すべからざることをより詳細に示そうとした。

これらの『原理』に於ける修訂は、彼が漸次その勞働價值説に對する修正を重要視するに至つたことを示すものであるが、しかしその程度を修正以上のものとはどうしても解することができないのである。(未完)

1) Ricardo, Principles, 1 ed. p. 4. 2 ed. p. 3.  
2) Ricardo, Principles, 3 ed. Gonnor's ed. p. 7.  
3) Ricardo, ibid. pp. 36-9.